

中長期目標	○未来に向かい 自分らしく輝き 豊かに生きる子どもの育成	今年度の重点目標	○学ぶ意欲と自己肯定感を高める主体的・対話的な授業づくり ○お互い認め合い、高め合う職職員集団の実現 ○安全で安心な学校の実現 ○「チームくらよう」の推進
-------	------------------------------	----------	--

年 度 当 初					評 価 結 果 ()月			
評価項目	部	評価の具体項目	現 状	目 標 (年度末の目指す姿)	目 標 達 成 の た め の 方 策	経 過 ・ 達 成 状 況	評 価	次 年 度 に 向 け た 改 善 方 策
学ぶ意欲と自己肯定感を高める主体的・対話的な授業づくり	小学部	○一人一人が主体的に活動したり表現したりする姿へ繋げる指導・支援の工夫	【A部門】 ・担任に限らず、その他の指導者に対しても児童が自分なりの方法で表現したり、自分の思いを伝えたりする姿が増えてきているが、さらにコミュニケーションの幅(いつでも、どこでも、誰とでも)を広げることができるよう、それぞれの対応力、表現力を高めていく必要がある。 【B部門】 ・児童が主体的に活動したり、自分なりの方法で伝えたり表現したりすることができるようになってきている。さらに、それらを定着したり幅を広げたりするために、安心できる環境を設定し、教育活動全般を通して、発達段階に応じた表出や表現できる場を作っていく必要がある。	○児童が主体的に活動したり、伝えたいことや表現したいことを、自分なりの方法で表出したり表現したりすることができる。 ※学部アンケートで、教員の8割以上が「できた」と回答	・児童が主体的に活動したり、自分なりの方法で表現したりできる場の設定や学習内容を考えた授業づくりを行う。 ・児童の実態や目指す姿、そこに向かう段階等を指導者間で共有し、学習内容や指導・支援方法を検討する。また、よりよい授業づくりのために、事後には評価・改善を行う。 ・効果的な学習活動や支援等について指導者個々が自己研鑽を積むだけでなく、指導者間で児童の表出力や表現力を広げるために有効な支援ツールや教材・教具の情報共有をしながら、授業づくりを通して指導者間で共に高め合い、学び合う。			
	中学部	○伝える相手を意識した表現力の育成を目指した授業の充実	【A部門】 ・聞き覚えのある声に反応したり、支援者からの働きかけに応えることのできる姿が増えてきている。さらに相手の働きかけを受け入れることができるように心身の状態を整えたり、自分の気持ちや思いをよりの確に伝えることができるような方法の幅を広げていく必要がある。 【B部門】 ・カードやジェスチャー、発声や表情など自分なりの方法で、教師や友達に思いを伝えようとしていたり、教えてあげたりする生徒が増えてきている。 ・国語の5W1Hでの文章構成の学習や自立活動でのコミュニケーションの学習などを通して、出来事などを説明したり、自分も気持ちを表現したりする力が伸びてきている。生徒同士のやり取りの中では、相手の気持ちを考えたり、相手にわかるように伝えたりといった「相手」を意識した伝え方には至っていないこともある。	○相手を意識したやり取りの方法を身につけ、自分なりの方法で気持ちや思いを伝えることができる。 ※学部アンケートで、教員の8割以上が「できた」と回答	・日々の授業や支援方法、教材教具についての情報交換を重ね、指導者同士の学びあいを深める。 ・指導者とのやり取りだけではなく、生徒の実態に合わせた、生徒同士が対話できるような学習スタイルや、生徒が進んで考えたり、生徒に進行を任せたりする場面の設定など工夫する。 ・指導者が生徒同士のやり取りをコーディネートしながら、成功体験を積めるようにする。			

	高等部	○周りの人(指導者と生徒、もしくは、生徒同士)とのやりとりの中で、自分の意思や、なぜそう考えたかを相手に伝えることができる生徒の育成	【単一障がい学級】 ・生徒同士のやり取りが、増えてきている。しかし、授業中や興味がある話題の中で自分の考え方を伝えることはできて、普段の会話では難しい。 【重複障がい学級】 ・指導者が、「なぜそう思ったの?」と問いかけることで、理由を考えようとする姿が増えてきた。今後は、生徒の実態に応じた表現方法を広げることや、指導者の受け止め方を工夫することで、生徒の伝えたい思いが伝わったと実感する経験を増やしていきたい。	○周りの人とのやり取りの中で、自分の考えを、なぜそう考えたのか、それぞれの表現方法で相手に伝えることができる。 ※学部アンケートで、教員の8割以上が「できた」と回答	・自分の意思表示だけで終わるのではなく、なぜそう考えたかその理由を聞く。 ・生徒同士で会話のやり取りをすることができる話題や、授業の仕掛けを行う。 ・それぞれの生徒の伝え方や表現方法を指導者間で共通理解しておき、伝わったこと、伝わらなかったことをフィードバックすることで、伝わった実感を持つことができるようにする。			
評価項目	部	評価の具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	次年度に向けた改善方策
お互い認め合い、高め合う職員集団の実現	授業づくり部	○児童生徒が主体的・対話的になるような授業づくり	・全体授業公開では、各授業の良いところを見つけるだけでなく、建設的なやり取りによりアイデアや改善点等の活発な意見交換ができた。発表者にとっても参観者にとっても実りある研究となった。また、普段から「主体的・対話的な授業づくり」を意識して指導、支援を行い、児童生徒の表現力の向上が日常的に見られるようになった。 ・今年度はさらに、主体的・対話的な授業づくりについて、各学部の授業グループでの建設的な話し合いを一層進めていく必要がある。	○授業づくりを通して指導者同士が建設的なやり取りによりアイデアや改善点について話し合い、専門性と授業力向上を図ることができる。 ※教職員アンケートで8割以上が「できた」と回答	○各学部では、計画から実施まで建設的な話し合いが行われるように授業グループを設定する。 ○授業者と参観者が授業について建設的に話し合うことができる場を年間8回以上設定する。 ○授業改善に関わる研修を企画し、目指していく授業の在り方について教職員の共通理解を図る。			
	教務部	○学習活動への評価規準の活用を目指した諸帳簿のよりいっそうの整備	○各教科の内容一覧や評価規準を明示することで、それらを活用しながら評価等を行う指導者が増えた。反面、評価の時のみに規準を用いるという実態もある。	○評価規準を意識した学習活動の展開を通して、指導と評価の一体化を推進する。 ※教職員の評価シート記入率が8割を超える。	○本校独自の評価シートを充実させ、単元ごとの学習状況を評価規準に照らし合わせながら記入できる形に整える。 ○評価シートと個別の指導計画、指導要録との関連性についての説明を全教職員に行っていく。			
	全体	○時間外業務の原因把握と業務カイゼンの推進	○個々や学校全体で業務を見直し、継続的に業務量の平準化を図る必要がある。 ○月45時間、年間360時間を超えて時間外勤務をしている実態がある。	○勤務簿の自己管理を徹底するとともに、教職員アンケートに回答する形で自ら業務カイゼンに参画し、その具体的な改善策を具現化していく。 ※教職員アンケートで8割以上が目標達成のための方策を「できた」と回答	○会議をしない日やノー残業デーを設定し、定時退勤への意識を高めるとともに計画的に勤務をする環境を整え、勤務簿の自己管理の徹底を図る。 ○業務カイゼンに関する教職員アンケートを実施し、一人一人が業務カイゼンに向けての意欲を高めるとともに自ら考えた改善策を学校全体で具現化することに取り組む。			

評価項目	部	評価の具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	次年度に向けた改善方策
安全で安心な学校の実現	健康教育部	○児童生徒の健康増進(口腔衛生、食育、性に関する指導、体力向上)に向けた学習の充実を図る。	○コロナ禍を経て健康に対する意識を教職員だけでなく、児童生徒も持つようになった。日頃からマスクをつける等、体調不良にならないよう気をつける児童生徒が多数いる。今よりも「さらに健康に生活するために」という視点で健康増進に取り組む必要がある。健康な生活を送るために食事や性、体力との関係性を理解している児童生徒の割合は低い。	○歯肉炎の予防に向けて歯みがき指導の充実を図っている。 ※歯みがき指導において8割以上の教職員が「おおむねできた」と回答。 ○肥満傾向の生徒が減少している。 ※肥満傾向の児童生徒が3%以上減少している。 ○保健指導(食育、性に関する指導、熱中症予防等)の充実を図ることができている。	○全国小学生歯みがき大会に小学部だけでなく、中学部、高等部も参加する。 ○歯みがき指導(歯肉炎の予防)や健康増進に向けた学習の充実を図れるように、心とからだいきいきキャンペーンを活用し学習部や委員会と連携したり、保護者の意識向上に取り組んだりする。また、外部講師を活用することで児童生徒の意識向上を図る。			
	安全・環境部	○安全・安心への意識と体制作り	○各種訓練、研修会、ヒヤリハット等を通して、教職員の安全で安心な環境づくりに対する意識を高めるよう努めている。 ○地震、火事、不審者などの避難訓練の方法や緊急時に使用する機器の扱い等に課題が挙げられている。	○児童生徒が安全・安心な環境で学習できるよう、避難訓練や安全点検、ヒヤリハットでの情報共有を適切に行っている。 ※教職員の8割以上が、「安全・安心な環境づくりを適切に行っている」と回答。	○安全点検を適切に行い、確実に事務部へ報告する体制を整える。 ○ヒヤリハット事例の共有を継続する。重大事案がある際は職朝で確認し、共通理解する。 ○安全・安心への意識を高める体制作りを行うことができるよう、避難訓練等の方法を検討・見直ししながら計画、実施する。			
	安全・環境部	○より安全・安心な教育環境	○定期的な掃除道具点検、職員作業により、校舎内外の環境が整った。 ○TEAS報告やエコ点検を定期的に行っている。また年度末には点検内容を見直したり、データの集計結果を検証して環境整備の呼びかけを行ったりしている。	○安全・安心な教育環境づくりを行うとともに、エコに対する意識が高まっている。 ※エコ点検で◎の割合が8割以上。	○各学部・分掌ごとに、管理場所や掃除道具の整理整頓を呼びかけ、安全・安心で無駄のない環境づくりを行う。 ○委員会・分掌と連携し、環境に関する啓発をしていく。 ○電気、水の使用に関してエコにつながる具体的な取り組みを示すとともに、学期に1度掲示板に水道・電気の使用量やゴミの処分量のデータを載せ、全校への意識づけを行ったり、教職員への協力を呼びかけたりする。			

評価項目	部	評価の具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	次年度に向けた改善方策
「チームく らよう」の 推進	情報教育部	○信頼関係を築ける開かれた学校づくりに向けた本校の魅力ある教育活動の情報発信 ○児童生徒の個別最適・協働的な学びに向けたICT活用 ○働き方改革に繋がるICT活用による効率的な業務改善	○学校ホームページについて、定期的に最新の教育活動の情報を掲載することができているが、古い情報が放置されていたり、文字サイズや配色などデザインの統一性に欠けるところが見受けられる。 ○指導者用端末や児童生徒の1人1台端末整備の遅れがあるためICT活用による学習活動が十分に実施できていない。 ○ペーパーレス化が徐々に進んできたが、教職員のICTリテラシーの差があったり、トラブルへの対処などの問題があったりする。	○学校ホームページによる情報発信の充実を図るとともに、必要な情報にアクセスしやすいようにするなど利便性が高まっている。 ○児童生徒の1人1台端末の活用とともにデジタル教材を取り入れ、学校と家庭の連続的な学びができるよう効果的なICT活用の充実を段階的に図っている。 ○教職員のフォローアップ研修や個別支援を継続しながら、指導者用端末を用いて、ペーパーレス化とクラウド活用を図り、より一層の校務のDX化推進を図っている。 ※教職員アンケートで8割以上が「できた」と回答。	○くらようダイアリーの定期的な更新とともに、学校ホームページの内容やデザインの統一性などレイアウト等の改善を図る。 ○指導者がより効果的な学習指導ができるよう引き続き研修や個別相談を行い、インタラクティブ教材などを活かしながら協働的な学びと個別最適な学びの実現を図る。また、家庭と学校での連続的な学びができるよう端末の持ち帰りを検討する。 ○教職員研修や個別のフォローアップとともに、本校で「ICT活用ガイドンス」を作成することで、分かりやすいICT活用を目指す。また、生成AIの活用による各分掌業務の効率化を実施する。			
	支援部（校内）	チームによる生徒指導体制の構築	○校内で発生した生徒指導事案については作成した生徒指導体制の流れに沿って報告、連絡、相談を行い、支援を行っている。しかし、事案によっては、学校全体での周知に至っておらず、対応が遅れたり支援が十分でなかったりすることがあった。	○学校全体で生徒指導体制を共通理解し、迅速、確実、適切な流れで児童生徒への支援を行うことができる。 ※入ってきた情報に対して、生徒指導体制の流れに沿って対応している。	○生徒指導体制について改善、修正を行い年度初めに教職員全体に周知する。必要に応じて学部会などで再度確認し、スムーズな連携につなげる。 ○学校生活アンケート、個別面談等を活用し、実態把握の徹底を図る。 ○学部と支援部の連携を特に意識し、日常的な情報共有を心がける。			
	支援部（地域）	地域校への早期支援の充実	○日々地域の園、小、中、高校等からの教育相談にあたっている。昨年度は年度当初から多くの相談業務があり、年度末にはすでに次年度の相談依頼もあった。対応をするにあたり、早くからサポートを行った方がより良い支援につながるケースが多く、早期支援の重要性を感じている。	○地域校に対して早期からのアウトリーチ型の支援を行う。 ※本校が早期支援として受けた教育相談の内、状況の改善したケースが8割以上。	○中部地区の特別支援教育担当者会でセンター的機能の取り組みについて情報発信をする。また、本校から地域校に対して困り感や気になっていること等がないか聞き取りを行う。 ○これまでと同様に関係機関との連携を密にし、情報収集を行う。 ○早期支援の検証、評価を支援部全体で行う。			
	キャリア教育部	○保護者や教職員の研修会への参加 ○教職員のキャリア教育への理解を深める	○集合型の中部地区福祉セミナーを実施し、小学部や中学部の保護者も参加することができた。また、視察研修会や人権教育研修会などを計画的に実施し、キャリア教育だよりで卒業生の動向等を掲載するなど、啓発を行ってきた。より啓発を図るため、今後も継続して実施するとともに、参加者が増えるように開催の工夫を行う必要がある。	○中部地区福祉セミナーへの呼びかけを地域に広げる。 ※中部地区福祉セミナーや各研修会の参加者が前年度よりも増えている。	○中部地区福祉セミナーの参加対象者を中部地区小中学校、県内の全特別支援学校へ拡大する。 ○保護者、教職員を対象とした福祉事業所等の視察研修を実施し、開催時期を夏休みに設定して、参加を促す。 ○保護者、教職員に西中校区同研への参加呼びかけをする。 ○各研修会等の参加者が増えるように担任からの呼びかけを強化する。 ○キャリア教育だよりの発行。			

評価基準 A:十分達成 B:概ね達成 C:変化の兆し D:まだ不十分 E:目標・方策の見直し

〔100%〕

〔80%程度〕

〔60%程度〕

〔40%程度〕

〔30%以下〕